

虫の目 鳥の目

1 行動は思考を弱める

①目先の出来事にあくせくし、バタバタと仕事をしている人々を見ると、哲学者でモラリストのアラン（1868年-1951年）を思い出す。アランは、行動する人をこんな風に皮肉る。

警視総監は、最も幸せな人間である。なぜなら、彼はいつも行動しているからだ。彼は、火事や水害や土砂崩れや建物の崩壊などの処理のため、勤務時間中一瞬の隙もなく明確な行動をすることが求められている（以下、アラン『幸福論』神谷幹夫訳 岩波文庫による）。

②アランは、警視総監を羨んでいるわけではない。行動する人は時間に追われ、じっくりと物事を考えることもない。そう批判しているのだ。

人はよく、泥棒や追いはぎは心の中で何を考えているのだろうかと思うが、彼らには心の生活などないとぼくは思う。獲物をねらっているか、眠っているか、いつもこのどちらかだ。

彼の予見する力は、自分の足許や手先までを照らして見るにすぎない。だから、彼の心には罰せられるという考えも浮かばなければ、ほかのどんな考えも浮かばない。こういう聴く耳をもたない、見る眼をもたないマシーンほど戦慄すべきものはなにもない。

③行動は思考を弱める。アランによれば、警視総監は最も幸せであるが、最も考えない人間である。

わたしたちは目先の出来事が些事か大事かを吟味することもなく、ただバタバタとその処理に1日を過ごす。目前の些事を過大視し、逆に将来の大事を軽視して、判断を誤る。重視すべきことを軽視し、軽視すべきことを重視する。重視すべきことと、軽視すべきことのバランスを欠くのが人の習性である。

2 日本的思考：「虫の目」

①目の前の出来事は強力な磁力をもっている。事の大小にかかわらず、人は目先の出来事に心を奪われてしまう。動物である以上、われわれはまず目先の出来事に対応せざるを得ない。だが、目先のことばかりを追っていると、長い目では最悪の結果をもたらすことがしばしばである。

②わたしが日本的な思考法の欠陥に気づいたのは、狂牛病事件であった。

日本人は現実密着型の考えが極めて濃厚である。いわば地べたに張り付いて目先しか見ない。虫の目しかもたない。欧米流思考と比べて、決定的に違う。しかし、そのことを自覚しないから、同じ間違いを繰り返してやまない。

③2001年春、EUは「日本で狂牛病発生の可能性がある」との見解を発表する予定だった。だが、農水省は再三抗議を繰り返し、結果的に公表は見送られた。

同年6月、当時の熊沢農水事務次官は「日本で狂牛病の発生はなく安全性は高い」と再度強調。そのわずか3ヶ月後、日本国内で感染牛が発見された。明らかに狂牛病のリスクを見過ごしていた。

④その後の政府のドタバタ劇は目を覆うばかり。目先対応の^{びほうさく}弥縫策に終始した。その結果、牛肉偽装事件なども相次ぎ、畜産業、食品加工業、流通業を巻き込む一大社会問題となった。

⑤EUが他国のリスクを読んだのに、日本の政治家や官僚は、なぜ自国のリスクを読めないのか？ 日本人は目の前の出来事に吸い込まれ、自己中心の狭い世界しか見えず、状況を客観的に把握する力に欠けるのではないか？

⑥官僚も、目にヴェールがかかって周りが見えない。業界の保護、省益の維持、政治家への付度、自己の保身など、身の回りの事情だけしか見えない。外の世界への想像力ゼロ、というか、公を考える視点が皆無。解剖学者・養老孟司さんのいう「バカの壁」に守られ、陸の孤島に住んでいる。

⑦利害が複雑に絡み合うのは日本もEUも違いはないだろう。違うのは、大所高所から状況を見る視点である。個別の利害を離れ、データに基づいて客観的に現実を把握する。これが日本人には決定的に欠けている。

⑧考える力とは、目の前の出来事の背後にある、目には見えない事象を相互に関係づけ、そこから物事の本質を抽出する能力である。関係づけができれば、狂牛病発生のリスクを読めたはずである。

狂牛病のリスクを読み、きちんとした対策をとっていたら、狂牛病問題はソフト・ランディングできた。近視眼的対策を繰り返す日本的思考の欠陥が、日本の国益を害した。

3 さまざまな「鳥の目」

①日々の仕事もきちんとなしながら、しかも理性的に状況をとらえるにはどうすればよいか？

肝要なのは、状況に密着せず、全体的な状況の中で物事をとらえる視点・心構えである。具体的方法について、さまざまな職業の人がさまざまな言葉で語っている。

たとえば「全体像を見よ」「遠くを見よ」「鳥の目をもて」「高处より考えよ」「俯瞰する視点から見よ」などなど。

これらをくくって、仮に「鳥の目」と呼ぶことにしよう。鳥の目とは「鳥が空中から地上の風景を俯瞰して見るように、上空から全体を見る視点」をいう。

②多くの人が鳥の目の効用について語っている。

民族学者の宮本常一さんは、15歳で故郷を離れるとき、父親から次のような忠告を受けたという（2001年8月17日 日本経済新聞）。

汽車に乗ったら外をよく見よ。田畑の作物、家の大小などで地域の事情がわかる。初めて訪れた土地では必ず高いところに登って広く見渡し、全体の位置関係と特徴的なものをつかめ。時間があれば、できるだけ歩け。歩けば、いろんなことを教えられる…。

③受験講師の細野真宏さんは「新聞やテレビの情報は断片的な情報」にすぎないとし、全体像を描くことの大切さについて次のように語る（2001年7月21日 週刊東洋経済）。

ある事柄についての全体像を頭の中に描くことができれば、あとはニュースで聞きする断片的な情報も、その全体像の中の適切な場所に位置づけながら、きちんと理解できます。断片的な情報はパズルの1ピースです。パズルの全体像があれば、簡単に正しい位置にはめることができるのです。

④一橋大学教授の伊丹敬之さんは、経営者の備えるべき第1の条件として、「志の高さ」を挙げ、そのためには「遠くを見る目線」が必要であるという（2001年1月13日 日本経済新聞）。

（経営者の）第1の条件は、「志の高さ」である。単に自分の私利私欲を追うの

ではない公の心もち、結果として何を人生で達成したのかについて目的を高く持つ。もちろん、単なる理想主義や言葉が空疎にすべる志ではない。足元を見つづ、しかし遠くを見る視線は高い。それが、多くのことを考えさせ、自己修練の契機になる。

⑤積水ハウス会長の奥井功さんも、「遠くを見る」ことの大切さを説く（2001年1月23日 日経新聞夕刊）。

運転免許をとったのは50歳を過ぎてからだ。その時に学んだのは「少し遠くを見る』ということだ。

習い初めは、必死の思いで、ハンドルを強くにぎり、目はボンネットのすぐ先ばかりを見て走らせるのだが、すると教官は、「もう少し先を見て運転せよ」と指導するのである。じっさい、くるまの運転は常に100メートルくらい先を見てせねば、けっして上達しない。

わたしはせっかちな性分だが、いらい、ものごとの判断にあたっては、自先の現象ばかりにとらわれず、少し遠くを見る心構えをするよう努めている。

⑥作詞家の松本隆さんは「俯瞰の視点」「鳥の視点」を重視する（2001年8月8日 日本経済新聞夕刊）。運転の心得を語っているが、その視点は奥井さんとは微妙に異なる。

ドライブをしていて、大切なことは「視点』だとぼくは思う。

前の車のテールランプばかり、くいいるように見ているのではなく、ちょっと上を飛んでいる鳥の目から見たように、自分を外側から俯瞰して、客観的に見る視線。

生きていて、運転に限らず、自分の主観だけにこだわり、だんだん視野が狭くなっていく。

そういう人は目の前のことしか見えていない。よくいう近視眼的な生き方である。

詞を書くときも、頭で書こうとすると、必ず視野が狭くなり、つまらない。書いているぼくの頭上に、もう一人のぼくがいる。その視座からは過去から未来まで見渡せるのだ。

⑦この様に、鳥の目といっても自らを高見において状況を見下ろすのではない。それでは単なる自己中心の見方になってしまう。高处から他者を見下ろすだけでなく、見下ろした風景の中に、また、`見`められ`る`自分がいる。わたしは「風景の中の一人」であると同時に、その風景を上から見ているわたしがいるのだ。

⑧ちょっと視点はずれるが、アランも「遠くを見る」ことの大切さをこう語る。

憂鬱な人に言いたいことはただ一つ。「遠くをごらん下さい」。

憂鬱な人はほとんどみんな、読みすぎなのだ。人間の眼はこんな近距離を長く見られるようには出来ていないのだ。広々とした空間に目を向けてこそ、人間の眼はやすらぐ。夜空の星や水平線をながめている時、眼はまったくくつろぎを得ている。

眼がくつろぎを得る時、思考は自由となり、歩調はいちだんと落ち着いてくる。全身の緊張がほぐれて、腹の底まで柔らかくなる。

自分の力で柔らかくしようとしても、だめなのだ。君の意志が君の中にあって、君に対して注意を払い、すべてをあらぬ方へ引っ張り、しまいには自分の首をしめてしまう。自分のことなど考えるな、遠くを見るがいい。

4 飛行士サン・テグジュペリ

①フランスの飛行士で『星の王子様』の著者サン・テグジュペリは、鳥の目よりはるかに高い視点から地上を見渡した。

彼は1900年フランスのリヨンに生まれた。3年後に、ライト兄弟が世界で初めて飛行に成功。飛行機の登場により、人類は初めて地上の生活から解放され、「天空の視点」を得た。

②サン・テグジュペリは、長じてパイロットのライセンスをとり、ツールーズ・カサブランカ間などの長距離飛行に従事し、その後南米の空を飛び回り、空路を開拓した。

彼は繊細な人物だったが、一面で冒険家、それも無謀な冒険野郎だった。

③33歳の時は、水上飛行機のテスト飛行中、危うく溺死するところだった。

35歳にはパリ・サイゴン間の飛行記録更新に挑戦の途中、巨大な雲海に飲み込まれて、リビア砂漠で遭難した。灼熱の炎天下を3日間、200キロ近くを飲まず食わずさまよい歩いた後、彼は砂漠の遊牧民ベドウィンに救われる。まさに奇蹟だった。

38歳には長距離飛行に挑戦し、グアテマラの飛行場で離陸に失敗し重傷を負った。

④上空から地上を見つめ続け、彼はいつしか状況を俯瞰する視点を身につけた。彼はこの「天空の視点」を体験から学んだようである。『人間の土地』（堀口大學訳）には、人間がいかにか小さな存在であるか、感慨を込めて再三再四述べられている（以下は、同書より一部省略・修正の上引用）。

トリポリの上空にはいったときには、ぼくはすでにサングラスをはずしていた。やがて砂が金いろに光りだした。なんと地球上に、人影がまばらなことだ！またしてもぼくには思えるのだった、河や森かげや、人間の住居^{すまい}などは、幸運な偶然の結合にしかすぎないのだと。砂礫^{されき}や岩石の領分が、なんとおびただしいことだ！

あの灯の一つ一つは、見わたすかぎり一面の闇の大海原の中にも、なお人間の心という奇蹟が存在することを示していた。あの一軒では、読書したり、思索したり、打明け話をしたり、この一軒では、空間の計測を試みたり、アンドロメダの星雲に関する計算に没頭したりしているかもしれなかった。また、かしこの家で、人は愛しているかもしれなかった。

⑤彼にとっては、人間の存在そのものが極めて脆弱な、幸運な偶然の結晶にしかすぎなかった。それは、地上に這いつくばっているわれわれには、持ちえない視点だった。

5 遠くを見る者は嫌われるか？

①29歳のとき、世界恐慌が勃発した。社会不安に乗じてイタリアではムッソリーニが、ドイツではヒトラーが、フランスでもファシストが台頭した。フランスの共産党と社会党は手を結んで人民戦線内閣が成立する。

騒然たる時代である。パイロット仲間のメルモーズは極右政治団体「火の十字団」の団長に就任。サン・テグジュペリを何かと引き立ててくれた文壇の重鎮アンドレ・ジードは、左翼転向宣言を出した。

②左翼と右翼の激しい対立の中で、しかし、サン・テグジュペリはどの陣営にも組みしなかった。いや、むしろ彼は「イデオロギー」を軽蔑し、その背後に主導者のどろどろとした権力欲を見た。

理屈をこねようと思えば、どんな理屈もつけられる。理屈やイデオロギーは欲望の変形にすぎない。そんなものに踊らされては、人は不幸になるばかりである。

③飛行体験を通じて彼は、地上の尺度を越える視点を身につけていた。

イデオロギーを論じあってみたところで、何になるだろう？すべては、立証しうるかもしれないが、またすべては反証しうるのだ。しかもこの種の論争は、人間の幸福を絶望に導くだけだ。

人間に軍服を着せると、彼らは、戦争礼讃の賛美歌を歌い、戦友とパンを分かちあうだろう、彼らはまた大事に当る気概も見いだすはずだ。ただ彼らは、この差出されたパンのおかげで、生命を失う結果になる。

彼の視点は、大衆のそれとは明らかに異なった。戦争を批判する彼の意見は理想論とみなされ、大衆には受け入れられなかった。

④こうした故事をみると、状況を見る視点の高さにより、人の意見は全く違うことが分かる。

遠くを見る者は、近くを見る者に嫌われる。

たしか、サン・テグジュペリの言葉だったはずである。